

(個人的な) インド出張のご報告

3月12日に渡印、チェンナイよりシンガポール経由で22日に帰国致しました。

12日の段階では、これほどの惨事になっているとは知らず、インドに入国して徐々に被害の大きさを知った次第です。

13日チェンナイより南に下ったレストランで一人のインド人が話しかけてきました。「日本はナンバー・ワンだ。地震の被害は出ているが、町はすぐに復興するだろう。家も道路も工場すぐに復興するだろう。しかし亡くなられた被災者の肉体は復元されない。悲しいことだ」

正直に言えば、この慰霊のことばを聞いたときも、それほど深刻な気持ちではなかったのです。

次々に出会う見ず知らずのインド人が慰霊のことばを伝えてきます。

「あなたの家族や親戚は大丈夫か」

それでも、日本人であるのになお現状を認識していませんでした。東京には学生時代の友人が多くいますが、東北地方に近親者はいません。

インドを去る20日、世界遺産マハーバリプラムのレストランで夕食を摂ることにした。レストランのマネージャーが注文を取りに来ました。

「日本人ですか」

そうだと答えると彼が興奮したようにしゃべり始めました。

「家でテレビを見ていた妻が突然泣き出したのです。津波で流されるスクール・バスがあったという間に沈んだ。娘が泣き出したのです。私も泣いてしまいました」

この映像は11日に観たような記憶がありました。

「私はすぐに決めました。1,000ルピーをすぐさまインド政府に送金しました」

1,000ルピーは円に換算すると、おおよそ2,000円です。彼の服装から判断して、月給は6,000から8,000ルピー程度でしょう。

思わず目頭が熱くなり胸が詰まりました。

レストランを去るとき、彼の手を力強く握って感謝のことばを伝えました。

「ありがとう」

英語の「サンキュー」よりも意思が伝わると思って、日本語を発しました。

空港に向う途中で塩の香りがして、あることに気がつきました。

この辺りの海岸はスマトラ島沖地震(2004年)で多数の被災者が出たことを思い出したのです。その支援の一助に加わったことがあります。彼らの縁者が被災したのかどうか聞

き漏らしました。いずれにしても、見ず知らずの日本人のために涙を流す人がいたことに胸が突き動かされました。

東北に近親者がいないと言いましたが、妻の叔父家族が仙台に住んでいたことを後日知りました。無事だったようですが避難生活をしていることが分かりました。

縁者ではありませんが、学生時代に僻地教育で気仙沼の小学校に行ったことがあります。気仙沼市から海岸を北に上がった小さな湾の漁村でした。上野駅から気仙沼駅に着くと地元の人たちが大宴会を催してくれて歓待されました。

小学校の名前は記憶から遠のいてしまいましたが、子どもたちと制作したオブジェの記憶は今日まで鮮やかに残っています。遠洋漁業に従事する若い漁師が、夜宿舎の公民館にやってきて、「何でもいいから話してくれ」と私たちの幼い知識を求めてきました。その話題を海洋の船の中で思い出すのだと言いました。

翌日美しい湾に舟を浮かべ、釣りたてのイカを食させてくれました。それは昨日の味のように味覚されます。

小学生たちも今は50歳代でしょう。彼らの家族も若かった漁師も消えてしまったのではないかと、地図を見ながら悲しくなります。